
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 55

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1081. 常軌を逸した世界へ
- 1082. 最後の一日が来る日まで
- 1083. 学会を終えて
- 1084. 終止符へ向けて
- 1085. つながる道と開かれる扉
- 1086. 夢と熱量の充満
- 1087. 第二弾の書籍との向き合い方
- 1088. ダイナミックシステムアプローチの真髓の会得へ向けて
- 1089. 準備期間
- 1090. 偶然の内側
- 1091. 感動の本源:5羽の鳥の家族より
- 1092. 二ヶ月半の休暇に向けて
- 1093. 日本の思想と日本語
- 1094. 発達の不可逆性と自己の永劫回帰性
- 1095. 「自分の夏」
- 1096. 診断・予測に関する人間の脆弱な直観力
- 1097. 眼・意志・心
- 1098. 「健全な自己批判」と精神的自傷行為
- 1099. 作曲への取り組みについて
- 1100. 外発的動機との向き合い方

いよいよ今日から、アイデンティティ研究の国際学会 (ISRI) の初日がフローニンゲンで始まった。早朝から夜までこの学会に関与していたため、今日は日々の合間合間に日記を書き留めることはできず、就寝時間をいつもより大幅に遅らせながら今この日記を綴っている。学会に参加しながら様々なことを考え、様々な体験を得ていたのであるが、今夜は少しばかりそれらの一端だけを書き留めておきたいと思う。

学会の会場を後にし、自宅に向かっている最中に、学術論文を執筆することに関する抑えきれない灼熱の思いが湧き上がってきた。その熱情の渦の中にいよいよ自分は没入する時期に来たのだということを知る。この煮えたぎるような思いを通じて論文を執筆することと向き合うことができれば、書くことを通じて生き、書き続けることによって人生を終えることが本当に実現されるかもしれない、という猟奇的な希望が湧いてきた。

以前の日記の中で書き留めていたように、もはや我慢も遠慮もいらないのである。何を通じて生きることが自分に幸福感をもたらすのか、何を通じて死に向かっていくことが自分なりの善き生き方なのか、もはや明確すぎるほど明確なのだ。それは私にとって、自分の内側のものを外側に形として作り出すことなのだ。作られたものを受け取るのではなく、自分で作り出していくのだ。

そのための具体的な行為の一つとして、文章を執筆するという実践的な営みがある。私は欧州での生活を始めて以降、日記や論文を執筆することに関してある境界線を設けていた。その境界線の内側は常識的な範囲のものであり、その外側は狂氣的な範囲のものである。これまでの私は間違いなく、自分で決めた常識の範囲内で文章を書いていた。

しかしここからは、常軌を逸した領域に足を踏み入れていこうと思う。それは今の私が常軌を逸していると思うだけであって、他の人から見れば驚くに値しないものかもしれない。いずれにせよ、これまで自分が引いていた境界線の外側に積極的に出ていこうと思う。全く別の次元で境界線を引き直すことが必要だ。

このような文章を書いている時は決まって、自己が一時的に肥大化しているを感じる。今日から始まった学会は、自己をさらに変容させるための触媒として機能していたがゆえに、一時的な現象

として自己が膨張しているのを実感する。こうした自己の膨張現象が、過去の自分が引いた境界線
を押し広げていくことにつながったのだと思う。全く別の次元の投入量を持ってして、常軌を逸した
次元の投入量を持ってして自分の仕事を進めていきたい。

狂気が自己を丸呑みにし、自己が滅却した状態で、「私が文章を書き続ける」のではなく、「文章が
私を書き続ける」という生き方を実現したい。私の生き方はそれであり、死に向かう方法もそれしか
ない。2017/5/19

1082. 最後の一日が来る日まで

数日間に及ぶ学会が今日の午前中をもって終了した。学会が終了した直後の今の気持ちは、小
鳥のさえずりが響き渡る穏やかな春の日曜日を象徴するかのようである。

今回の学会を通じて、確かに私は多くのことを学んだ。その道の優秀な研究者から多くの観点と洞
察を得たことは間違いない。だが、そうしたことよりも重要なことがあったように思う。それは、私が次
の一步を知らず知らず踏み出していたということだ。研究者として、そして一人の人間として何かを
深めていくことに向けて、自分の足で確かな一步を踏み出していたことが何よりも大きなことだった
ように思う。

それは意識的な一步ではなく、内側からの促しによる一步であった。「前に進むということはこういう
ことなのだ」とわかった。真に前に進むためには、前に進もうとする意図が混入する前の純粋な意図、
すなわち内側からの自発的な促しが必要なのだ。そうした促しをもたらしてくれたのが、今回の学会
であり、学会に至るまでに私が歩んできた全ての道だったのだと思う。

今この瞬間、あまりに多くのことが自分の内側を駆け巡っているのがわかる。その証拠に、今私はそ
れらを言葉にすることができない。それらは今の自分の言葉を超えた現象なのだ。同時に、それら
こそが自分の次の姿を表すものなのだとわかる。

最後の一日が来る日まで、もはや私は歩くことを止めはしないだろう。2017/5/21

1083. 学会を終えて

昨日、アイデンティティの研究に関する第24回目の国際学会“The International Society for Research on Identity (ISRI)”が終了した。いつも学会が終わるたびに湧き上がる感情は、一つの旅を終えた後の感情と似ている。とりわけ今回の学会において、私は運営側に回っていたため、無事に学会を終えることができ、昨日は安堵の気持ちで満たされていた。

そうした安堵感とともに、再びここから毎日少しずつ歩いていこうという気持ちが湧き上がっていたのも事実である。旅が終わり、帰路に着いた時に感じる安堵感と、再び自分の仕事や生活が始まることに対するある種の期待感が入り混じっていたのが、昨日の私の心境であった。

学会における出会いというのは大変貴重なものであり、そこでの交流はとりわけ大きな意味を持つ。そうした出会いや交流が、研究者として、人間としての成熟に深く関係するのだと思っている。当然ながら、学会での発表や他の研究者との意見交換によって多くのことが得られたのは確かである。しかし、そうした情報以上に重要なことが、私の内側に流れ込んでいく感覚を得ていた。

これもまた学会がもたらす大きな意義の一つだろう。内側に流れ込み、内側を満たすものを、今日から少しずつ咀嚼し、消化していきたいと思う。その進行は遅くて構わない。重要なことは、それらの感覚を真に自分の経験として昇華させていくことにあり、その速度は問題ではない。学会での体験が内側の深い部分に沈下し、上澄みとして浮上してきたものを文章の形に書き留めておきたいと思う。

昨日の午前中に学会を終えた後、午後から私は第二弾の書籍の三校の手直しを行っていた。三校の手直しが終われば、最終校となる。前作と同様に、二校を読み返していた時よりも、三校を読み返した時の方が多くの修正点が発見された。想像以上に手直しの箇所が見つかり、一昨日の夜と合わせると、三校を最初から最後まで読みながら修正点を見つけていく作業に多くの時間を充てることになった。

結局、夜中近くまで作業を行うことになったが、三校の修正点を全て洗い出すことができ、それを編集者の方にメールで連絡をして作業が完了した。第二弾の書籍が世の中に送り出される日もよいよだ。2017/5/22

1084. 終止符へ向けて

学会に参加していた数日間、自分の仕事をする時間がほとんど取れなかった。文字どおり、朝から晩まで学会に関与していたため、それは致し方ないことであった。また、生活のリズムも普段と異なっていたことも仕方ないことであった。そうした最中にあっても、自分の意識が絶えず自分の内側の静かな領域に安置していたことは面白い発見であった。

学会に参加する朝に聞こえてきた小鳥の鳴き声、夕方に学会から自宅に戻る最中に聞こえてきた小鳥の鳴き声は、私の意識をさらに深く安らかなものにするには十分であった。季節が春を迎えたからなのだろうか、朝夕、そして日中の至る所で小鳥の鳴き声がこだましている。就寝時においてですら、小鳥の鳴き声が聞こえてくるというのはなんとという至福だろうか。寝ても覚めても、幸福感をもたらしてくれるものが常にそこにある。

日が完全に沈むのは十時頃になった。闇夜の到来まで、あと二時間半ほどの時間がある。今この瞬間においても、小鳥の鳴き声がどこからともなく聞こえてくる。その声に耳を澄ませながら、私は少しばかり今日の出来事を振り返っていた。今日は早朝から、修士論文の最終ドラフトの完成に向けて修正作業を行っていた。

人間が成熟の極限に至ることが起こりえないのと同じように、文章というのも完全性に至ることはないのだと思った。つまり、文章を執筆するということが、常に私たち自身の絶え間ない変化と対になって行われるものであるがゆえに、ある文章を完成させることは起こりえないということである。

実際に、今日も論文を修正していると、より肉付けする箇所や削除する箇所などが見つかった。これらは単純に内容上の不適切さから生まれたものというよりも、自分の内側の成熟から必然的に生まれた追加・修正項目であった。このように自己と文章の双方が絶えず深まっていくという性質を持っているとはいえ、論文の形式上の終止符を必ず打たなければならない。その終止符を起点として、研究内容をさらに深めるために次の論文に移っていくことが大事なのだ。

そのような終止符を打つことの中には、儀式的な意味が隠されている。ここから数週間以内の私がやるべきことは、この論文が持つ意味世界がいったん完結し、さらなる意味の探究へ向かって開いていくような作用を持つ終止符を打つことだ。

「納得のいく終止符」という言葉はあまり適切ではないかもしれないが、一つの論文が閉じ、そこから新たに次の論文に開かれていくための必然的な終止符があるのだと思う。それを打つために、明日からまた自分のリズムで仕事に向き合いたい。2017/5/22

1085. つながる道と開かれる扉

昨夜、就寝前に少しばかりオンライン学習の研究を行っている大学機関を調べていた。これは本当に何気なく調べていただけだったが、そこで思わぬ発見をした。前々から気になっていた米国のある大学が、オンライン学習の研究にかなり力を入れていることがわかったのだ。その大学は、オンライン学習の中でも、とりわけ近年注目を集めている“MOOC”と呼ばれる、インターネットを活用した大規模公開オンライン講座に関する研究に力を入れていることがわかった。

偶然ながら、私がフローニンゲン大学の二年目のプログラムで行う研究内容の一つはMOOCに関するものである。二年目は、MOOCに関する論文をいくつか執筆したいと思っており、フローニンゲン大学が提供するあるコースにまずは焦点を絞り、そのコース内でどのようなことが起こっているのかを多角的に調査していきたいと思う。

MOOCという学習環境はとりわけユニークであり、講師と生徒とのやり取りも通常のクラス環境で行われるそれとは異なり、講義の進め方や学習理解度の測定に関しても特徴的である。このように研究の観点は多岐にわたるため、まずは一つか二つほどの観点到絞って研究を開始していく予定である。

米国のその大学がMOOCの研究に力を入れていることを知るまで、私はオランダに後二年ほど滞在する計画だった。しかし、その大学がMOOCに関する研究者を募集しているようであったため、もしかすると、フローニンゲン大学での二年目が終了する前あたりにその大学の研究ポジションに応募し、二年後は米国にいるかもしれない。

遅かれ早かれ米国に戻るようになるだろうと思っていたのだが、このような形で米国に戻る道が開かれるとは思ってもいなかった。フローニンゲン大学での一年目に成人のオンライン学習の研究を取り上げ、二年目は特にMOOCの研究に力を入れようと思っていた私にとって、米国への道が自然と開けてきたことは何かの縁だと思わずにはいられなかった。

やはり、自分が探究したいと思う対象と真摯に向き合うことを継続させていると、その探究をさらに深める場所へ行くための扉が開かれるのだろう。これまで何度となく閉ざされた扉にぶつかってきたながらも、何度となく開かれた扉があったことを知る。今回の一件は、まさに巨大な扉が目の前に現れ、それが一気に開いたかのようなのであった。その大学が提供する研究ポジションに正式に応募するのは、今年の秋ぐらいになるだろう。それまでにMOOCに関する研究を進め、論文を少しでも執筆できたらと思う。

就寝前に、自分のこれまでの歩みとこれから歩む道が一举につながった感覚に陥り、私は少しばかり興奮をしていたようだった。実際に、就寝に向けての準備をしている最中、外の世界にこだまする小鳥の鳴き声が私の耳に入ることはなかった。それほどまでに、フローニンゲン大学での二年目の生活に希望を見出し、その後の米国生活へ大きな希望を見出していたと言える。そのような希望を持って、今日から再び仕事に取り組みたいと思う。2017/5/23

1086. 夢と熱量の充満

今朝は五時半に目が覚めた。目覚めと共に、昨夜の夢の印象が身体に絡みついているのがわかった。

昨夜は夢の中で、ある音楽教師に対して批判的な意見を述べていた。学校の校庭のような場所で、私は友人と少しばかり運動をしており、その後、音楽室のような場所に向かっていった。この場所が学校なのか定かではなく、運動をしていた場所が校庭なのかどうか、そしてその後に向かった場所が音楽室と呼べるようなものなのかは定かではない。

音楽室のような場所に到着した時、教室の前方にオーケストラの一団が何らかの曲を演奏しているのが見えた。教室に入り、私は教室の後方に着席し、その演奏に聴き入っていた。その演奏の音色が美しかったためだろうか、私を含め、隣にいた日本人の友人、そして少し離れた場所に座っていた見知らぬ欧米人の表情からは、自然と笑みが漏れた。

すると、教室の前方にいた音楽教師が、私たち三人が笑顔で音楽を聴いていることに対して注意をし始めた。その教師は年齢が非常に若く、音楽に関する知識と経験の未熟さから私たちに軽んじられていると勘違いしているようであり、私たちの笑みを嘲笑と受け取っていたようだった。

その音楽教師が私たち三人に懲罰として課題を与えようとした瞬間、私は自分の意見を述べ始めた。

「先生は何か誤解されているようです。音楽教師になることができたというのは、音楽に関する十分な知識と経験をすでに持っていることを証明しています。私たちが先ほど笑顔になっていたのは、演奏されている曲の音色を楽しんでいたからです。音を楽しみ、その感情が思わず笑みとして現れるというのは自然なことなのではないでしょうか。それこそが『音楽』だと思うのです。先生が施そうとしているのは『音殺(おんさつ)』教育です。音が持つ豊かな世界を殺し、音から私たちが汲み取る豊かな感情世界を殺すような、真の音楽教育とは程遠いことをやろうとしているように私には思えません。」

私が意見を述べ終わると、その音楽教師は何か忘れていたものを取り戻すかのような表情を見せた。その音楽教師は何も述べることなく、ただその場にたたずんでいた。その様子を確認した私は、静かに教室を後にした。そこで夢から覚めた。

夢から覚めてみると、自分の内側にほとぼしるような熱量が充満しているのを感じた。綺麗な青空が広がる爽快な春の朝にあって、私の内側は真夏を先取りするかのような熱気を帯びていた。2017/5/23

1087. 第二弾の書籍との向き合い方

第二弾の書籍のカバーデザインがついに決定したという連絡を、先ほど編集者の方から受けた。事前に三つのカバーデザイン候補を教えてもらっていた時に、直感的に一つのカバーデザインの虜になっていた。それは、私が本書に込めた想いと共鳴する音を放っているように私には思えた。私はそのカバーデザインを第一候補に選び、編集者の方に連絡をしていた。

著者がカバーデザインを決定することは基本的にはできないため、私は事の進行を見守ることしかできなかった。嬉しいことに、私が第一候補に選んでいたものが採用されることになった。カバーデザインというのは、書籍を世に送り出すことにおいて非常に大事である。それが多くの人に読んでもらえるか否かを決定づけるという理由のみならず、少しばかり大袈裟に響くかもしれないが、著者にとってそれは、魂の窓のような働きを持っている。

カバーデザインのいかんによって、著者が書籍に込めた魂が抜けていってしまうのか、それとも魂をそこに込めたままにしておくことができるのかが決定されてしまうように思うのだ。まさにカバーデザインは、その書籍における画竜点睛であり、今回の書籍に込めた私の想いと合致するデザインが選ばれて嬉しく思う。

書籍が世に送り出されるまでには、もう少し時間がある。来月の今頃は、全国の大型書店に本書が並び始めているだろうか。来月の今頃について少しばかり想像を巡らせていた。本書が世間からどのような評価を得るのかは定かではない。また、どれくらいの方々に読んでもらえるのかも定かではない。私は、人間の成長に関心のある全ての方に向けて本書を執筆した。できるだけ多くの方に手に取っていただき、肯定的・否定的な意見を含めて、本書に記載されているテーマや考え方について議論の輪が広がれば幸いである。

以前の日記の中で言及していたように、私は本書が世に送り出されることを持ってして、本書に書かれた内容から離れるという意思決定を下そうとしていた。本書で紹介した内容は、私が過去数年間にわたって探究してきたものであり、現在私が探究しているものを本書に盛り込むことはできなかった。逆に言えば、書籍には現在進行形でなされている探究内容を盛り込むことはできないのだと思う。それは、商業出版をする際の責任として、書き手である私自身が書こうとする内容を咀嚼している必要があるからである。

今現在私が行っている探究をさらに深めていくためには、第二弾の書籍に書かれた内容にいつまでも留まっていたはならないという思いがあった。しかし昨日、散歩をしている最中に、これから世に送り出される本書からすぐに離れるのではなく、逆に、そこで書かれた内容をさらに肉付けし、さらに深めていく形で本書と向き合っていこうと思った。

これは以前の私の発想とは少し異なるものであった。新たに芽生えた著者としての責任は、世に送り出された書籍の内容をさらに深めていくことであり、その知見を多くの方に共有していくことだろう。本書からすぐさま離れようとするのではなく、あえてしばらく本書に留まることを通じて、また新しい発見や気づきを得たいと思う。2017/5/23

1088. ダイナミックシステムアプローチの真髓の会得へ向けて

今日は午前中に、「成人発達とキャリアディベロップメント」のクラスに参加した。今日のクラスで取り上げる論文の発表を私が担当するという連絡を、担当教授から事前に受けていたため、自宅を出発する前に少しばかり自分のレジュメを読み返していた。

自宅を出発してみると、早朝の時間であるにもかかわらず、外の気温がずいぶん暖かく感じられた。今日と同じぐらいの気温であれば、早朝から半袖で出掛けることができると思った。道行く人を眺めていると、実際に半袖の人もちろほら見かけられた。私がフローニンゲンにやってきたのは昨年八月であるため、春のこの時期のフローニンゲンを私はまだ経験したことがないということにふと気づいた。

キャンパスに向かう私の心境は、これ以上ないほどに何かで満たされていた。「満たされていた」という言葉は、その時の自分の心境を表すのにふさわしく、また今この瞬間の自分の心境を表すにもふさわしい。心の中が絶えず暖かいもので満たされながら、私は日々の生活を送ることができている。何と有り難いことだろうか。

その他に必要なことはないのではないかと思われるぐらい、フローニンゲンの春を過ごす私の内側は満たされている。キャンパスに向かって歩いている最中、昨夜の偶然について再び考えを巡らせていた。昨夜は、人生が予期せぬ形で道を作ることに思いを巡らせていた。二年後はもしかしたら再び米国で生活を始めているかもしれない、という可能性が昨夜突如として浮上した時、私の人生は見えない何かときっと繋がっているに違いないと思わずにはいられなかった。

私たちは、自分の内側の成熟や能力の成長そのものの姿を捉えることはできない。捉えることができるのは、成熟や成長を遂げた後に現れる現象に過ぎない。言い換えると、成熟や成長そのものの生の姿を私たちは肉眼で見ることができず、また成熟や成長を促す力も目には見えない。それと同じような現象が、私たちの人生の形成過程の中に存在しているように思えるのだ。

以前から気にかかっていた米国のある大学が、現実味を帯びた形で私の目の前に立ち現れたことは、私たちの人生を形成するそうした目には見えない力の働きのおかげなのだろう。昨夜突如として現実味を帯びた可能性に向けて、今の私にできることを積み重ねていきたい。フローニンゲン大

学で過ごす二年目において、サスキア・クネン教授には論文アドバイザーという立場ではなく、論文の共同執筆者としての立場で引き続きお世話になることになるだろう。

一年目の研究においては、私はまだダイナミックシステムアプローチの真髓を自分の研究の中に盛り込むことができなかった。それは、発達に関する理論モデルを自ら構築し、それをもとに数式モデルを構築し、コンピューターシミュレーションを通じて数式モデルと理論モデルを検証していくということである。

まさに、クネン先生の大きな貢献の一つは、ダイナミックシステムアプローチが持つその一連の流れを発達研究に適用したことにある。非線形ダイナミクスやダイナミックシステム理論が発達科学の中で普及し始めている中において、数式モデルの構築とコンピューターシミュレーションを用いてそれを検証するという事は、多くの研究者が行っていることではない。

世界の研究者を見渡してみても、そうしたことを行っているのは一握りである。そのため、私はクネン先生からダイナミックシステムアプローチの真髓を会得したいと思う。それこそが、そもそも私がフローニンゲン大学に来た最大の目的であった。初心を思い出さなければならない。

確かに、非線形ダイナミクスやダイナミックシステム理論の発想そのものが研究において有益であることは間違いない。しかし、それらを単なるメタファーとして捉えるのではなく、一年目の研究を元に自分で理論モデルを組み立てていきたい。もしくは、既存の学習理論や発達理論の中にある私の関心を引く理論を取り上げ、それを数式モデルに変換し、変数の値が変化することによって、その理論が学習や成長にもたらす効果がどのように変化するかを検証するという研究を行いたい。

いかなる学習理論や発達理論においても、それは理論として形骸化したものではなく、生身の人間の学習や発達を説明する際に生命力のようなものを持つと思うのだ。つまり、それらの理論で語られている内容は普遍的な法則に則ったものであったとしても、理論が適用される人の状態やその人を取り巻く文脈の変化によって、理論が開示する現象にも変化が生じるはずである。

数式モデルを構築し、変数と定数の操作により、場合分けや条件設定をすることによって、一つの理論が開示する学習や成長に対する多様な現象を検証したいと思う。数式モデルの立案にせよ、コンピューターシミュレーションの方法にせよ、それらは以前履修したクネン先生のコースを通じて学

習済みであるが、それらを実際の研究に適用し、論文を執筆しなければ、ダイナミックシステムアプローチの真髓を体得することはできないだろう。二年目から新たに始めるクネン先生との共同研究が今からとても楽しみである。2017/5/23

1089. 準備期間

自分の内側から日本語がうまく出てこない日が少しばかり続いている。より正確には、日本語が内から外へ出て行かないだけでなく、外から内に入って行かない感覚に包まれている。それを証明するように、ここ数日間において、私は日本語で日記を記すことが難しかった。また、先ほど森有正先生と辻邦生先生の日本語に目を通そうとしたのだが、彼らの言葉が全く自分の内側に入らなかった。

このことからわかるように、ここ数日間は、日本語を司る感覚器官がまるで一時的な休暇に入ったようであった。そうした感覚を引き起こしたのは、5/18から四日間にわたって開催された第24回目の“The International Society for Research on Identity (ISRI)”に参加したことと関係しているかもしれない。

私はこの会議を通じて、研究者として今後仕事をしていくための重要な何かを確実に掴んだ。この会議は、私にとって、ある種の起爆剤のように思えた。それを証明するかのように、会議に参加している間中、その日の夜は興奮のあまりすぐに寝付くことができなかった。ベッドに横になって以降、次々と湧き上がる様々な問いと一つ一つ向き合っているうちに、あっという間に時間が過ぎ去っていくような体験をしていた。

確かに私は、この会議を通じて、アイデンティティの発達に関する様々な概念や理論、新たな研究手法と触れることになった。新たな情報を取り入れたことが重要だったのではなく、研究者としてのあり方や今後の歩み方に関して、自分なりの考えをさらに深めることができたことが何より重要であった。学会の最中、私は常に、「何も焦る必要はない」という言葉を自分に言い聞かせていた。自分はまだ準備過程にいるのだ。

しかも、納得のいくまで広く・深く、その準備を推し進めていく必要がある。後十年ほどは準備の期間であり、それが過ぎてから私はなすべきことをなそうと思う。納得のいく仕事を納得のいく形で、自

己が滅却するほどに激しく進めていくためには、強固な土台が必要になる。兎にも角にも、全ての雑音から自己を遮断し、準備に準備を重ねる毎日を送っていきたい。

そして、自分が準備期間にいることを隠す必要もない。準備の過程で考えていることや体験したことを、自己に刻印するかのように書き残していくことだけをしていけばいいのだ。自分の真の仕事を始めるにあたって、それ以外に最良の準備はないだろう。その日が来るまで、とにかく私は準備に準備を重ねたいと思う。2017/5/23

1090. 偶然の内側

薄黄色の太陽光が寝室に降り注ぐ。今日は五時半に起床し、早朝から素晴らしい空を拝むことができた。曇りがちの冬の時代を抜け出し、フローニンゲンも晴天の日がこれから続くようだ。今週一週間は雨の日はないということが、天気予報から分かっている。

私は日々の何気ない天気から、人間の内面に関して色々なことを考えさせられる。あの長く鬱蒼とした厳しい冬の時代は、私が深く深く自分の内側に潜っていくために不可欠であった。同時に、今私が謳歌している春の季節は、内側から外側に向かって何かを育てていくために必要な活力を私に与えてくれる。

起床直後にヨギティーを作ると、そのタグに「永遠なる太陽光は砂漠を生み出す」という言葉が記載されていた。光と影の問題は非常に厄介だ。太陽が常に当てられた大地が枯渇してしまうのと同様に、私たちの内側も、絶えず光を当てられると何か重要なものが枯渇してしまうように思えた。

枯渇してしまうものの代表は、私たち自身の内側の闇かもしれない。最近、闇の中でしか育めないものについて思いを巡らせることがある。実際に、自然界においても、深海や深い闇で覆われた環境でしか生存できない生物種がいる。そうした生物種の存在を思うとき、私たちの内側の闇の中でしか生存できない存在がいるような気がしてならない。

光によって闇を排除しようとするとき、そうした存在が抹消されてしまうことを念頭に置いておかなければならない。闇に吞まれることなく、そして闇を排斥するのでもなく、闇の中でしか育めないものを絶えず育てていくことも一つの真理に思われた。

早朝、まずはカントの“Critique of Pure Reason (1781)”を手書きで書き写していた。これは毎日の習慣の一つである。決められた分量を書き写したところで手を止めようとした時、文末に記されていた日付に私の目が向かった。見ると、昨年今日、私は全く同じ箇所を読んでいたことがわかったのだ。今日と全く同じ日である「5/24」に、昨年の私はカントのこの書籍を読んでいたことがわかった。この偶然がもたらした感情的な余韻の中に私はしばらくいた。

書齋から外の木々を眺めると、それは不動の姿でそこにたたずんでいた。昨日の午後、それらの木々は、夕方の春風によって優しく揺れていた。新緑の葉に黄色の光が当たり、葉の揺れは小川の流れるようにきらめいていた。その印象が私の内側に未だ強く残っている。

そのような光景を昨日に目の当たりにしたことも、今朝のカントの書籍の一件と同様に偶然の産物なのだろうか。今の自分が偶然と呼ぶものの内側には、偶然という言葉では片付けられないものが眠っていることをすでに知っている。2017/5/24

1091. 感動の本源:5羽の鳥の家族より

フローニンゲンの街の中心部から自宅に戻っている最中に、とある運河の水面に2羽の鳥が浮かんでいるのが見えた。近寄ってよくよく見てみると、2羽の鳥は草や土で作られた足場の上に立っており、1羽の鳥の足元には3羽ほどの小さなひな鳥がいた。それらの小さな小鳥を発見した瞬間に、この5羽の鳥は一つの家族なのだと理解した。ひな鳥は顔の前方が赤く、親鳥の顔の前方は白かった。

帰宅してから取り掛かるべき仕事があったため、そのまま素通りしようと思ったが、横目に入ったその家族の行動が愛らしいものに思え、しばらくそこに立って観察をしていた。1羽の鳥と3羽の小鳥が立っている足場は完全に泥で作られたものであり、もう1羽が立っている足場は、中がくり抜かれた四角形の窓板のようなものの上に枝や草が敷かれる形で作られたものだった。鳥の外見から性別を区別するのは難しいが、安定した土の上に立ち、足元に小鳥を保護している方が母親だろう。

一方、まだ完成していない枝や草が敷かれた方の上に立っていたのが父親だろう。しばらく観察をしていると、この鳥の家族が面白い行動をいくつか見せはじめた。観察を始めてからすぐに、父鳥

が運河のあちこちに出かけて行き、せっせと枝や大きな葉っぱやらを集め始めたのだ。運河の上に浮かんだ枝の中で、足場用に使える枝をしっかりと吟味しながら選んでいるように見えた。

実際に、父鳥は小さな枝や折れそうな枝には目もくれず、足場用に使えるしっかりとした素材の枝を運河から集めていることがわかった。枝を口にくわえては、巣に戻り、すぐさま別の枝を探しに運河に戻っていく後ろ姿は、まさに父親の背中であった。その間、運河に浮かぶ土の塊の上に立っている母鳥は、ピョピョと鳴くひな鳥たちに口移しで食べ物を与えているようだった。こうした観察を続けているうちに、もう暫く様子を見届けようと思い、私は運河沿いに置かれているベンチに腰掛けてさらに観察を続けた。

再び父鳥に目をやってみると、相変わらず運河の上をウロウロしながら枝や葉っぱを探している。すると突然、父鳥が海面に潜り始めた。運河の底に沈んでいるより重たい枝を発見したり、あるいは小鳥に与える餌を捕まえているようだった。運河の底から重たい枝を発見した際には、せっせと建築中の巣の方にその枝を運び、母鳥や小鳥に挨拶をするような仕草をしたり、時には家族に目をくられることなく、再び仕事に戻っていく姿に妙に打たれるものがあった。

母鳥がひな鳥を見守る姿と父鳥の働く姿を見て、この家族の生き方の中に全てのことが含まれているように思えて仕方なかった。そこには、「育む」ことと「作る」ことの本質があった。

最小単位の社会の中に、常に育むことと作る事が関係しており、動物も人間もその点においては全く等しいのだと思った。動物のそれの方がより原始的であるがゆえに、育むことと作ることの純粋性がそこに現れているように思えた。その純粋性に触れた瞬間に、私は感動の気持ちに包まれた。ベンチに腰掛けながら私が熱心にその鳥の家族を見ていたからだろうか、運河を囲むある一軒の家に住む老父婦がベランダから顔を出し、鳥の様子を写真に撮り始めた。

また、スーパーから帰ってくる最中の二人の主婦が同じくその場に立ち止まり、鳥の家族についてあれこれと会話を交わしながら、その様子を笑顔で眺めていた。やはり、ここに何か重要なことが隠されているのだと思わずにはいられなかった。

私たちがその場で立ち止まり、この鳥の家族を眺めることを促した「それ」に気づかなければならない。「それ」こそが、私たちに様々なことを考えさせ、様々なことを感じさせ、様々なことを教えるのだ。

その「それ」を見逃して生きてはならない。私たちに立ち止まらせることを促す「それ」は、生きることの本源であり、感動の本源のように思える。

その場を後にすることを決心した私の内側は、感動で満たされていた。2017/5/24

1092. 二ヶ月半の休暇に向けて

夕食を終え、一息ついたところで再び仕事に取りかかった。具体的には、「成人発達とキャリアディベロップメント」のコースで課せられている論文を執筆し始めた。この論文を執筆するにあたり、私は昨日、論文アドバイザーのサスキア・クネン教授にインタビューを行っていた。先生に何をインタビューしていたかという、科学者のキャリアにおいて、大学を移ることが科学者のアイデンティティとスキルにどのような影響を及ぼすのかを尋ねていた。

クネン先生は、フローニンゲン大学で博士号を取得後、ユトレヒト大学に移り、そこで助教授としての職を得ることによって科学者としてのキャリアをスタートさせたそうだ。当時のオランダにおいて、博士課程に在籍している者は、日本と同じように、博士課程の「学生」とみなされていたようだ。一方、現在のオランダでは、博士課程に在籍している者は「学生」ではなく、給料の支払われる「従業員(研究者)」として扱われる。先生の話によれば、学生からいきなり助教授になったことに伴い、最初はアイデンティティの形成に苦労があったそうだ。

先生からあれこれと科学者としてのこれまでの歩みを聞いているうちに、やはりフローニンゲン大学の研究環境は非常に優れているように思えた。先生も述べていたように、特にダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスを発達研究に応用することに関しては、フローニンゲン大学は世界的に見てもメッカである。また、研究者に多くの自由裁量権を与えていることもフローニンゲン大学の特徴であり、自由に研究に打ち込める環境は私にとってとても魅力的に映る。そうしたことから、フローニンゲン大学で博士号を取得する可能性は依然として私の中で高く、仮に米国で博士号を取得することになったとしても、ポスドクや助教授としてフローニンゲン大学にまた戻ってきたいと強く思う。

ダイナミックシステムアプローチを発達科学に応用する領域を切り開いたのは、クネン先生の協働研究者であり、なおかつ博士課程時代の先生のアドバイザーでもあったポール・ヴァン・ギアート教

授である。ヴァン・ギアート教授とクネン先生が、今から30年以上も前から現在にかけてこの領域を探究していることに対して、改めて多大な敬意を払った。一つの領域をこれだけ長く探究し続けることは、そう簡単にできることではない。この道の第一人者に師事できることを改めて有り難く思った。

先生にインタビューをしている最中、人間の発達に関して私が非常に広範囲の関心事項を持っていることは、今後の研究の内容をより豊かにしていくために不可欠なことなのだと思う。関心領域についてここで改めて列挙しないが、それらが非常に多岐にわたっていることは確かであり、その領域の広さから、なかなか一つ一つの領域を深めていくことができないことに対して時に焦る気持ちがあった。しかしながら、全くもって焦りを感じる必要などなく、いかに関心領域が広かろうが、その時その時において、一つ一つの領域と真摯に向き合うことが何より大切なのだと思う。

一年目のプログラムが終了すれば、およそ二ヶ月半ほどの休みの期間に入る。ここで私は、現在自分が関心を持っている領域の中でも、特に関心の強い領域に絞って、できる限り多くの論文と専門書を読むことに時間を充てたいと思う。最優先すべきは、ダイナミックシステムアプローチを活用した発達研究領域、非線形ダイナミクスを活用した発達研究領域、MOOC等のオンライン学習に関する研究領域であり、この夏の期間に、各々の領域についてそれぞれ100本ほどの論文に目を通しておきたい。

そうすれば、基礎的な知識基盤が確立され、それらの領域に関する言語を今とは異なる次元で扱えるようになるだろう。この夏の二ヶ月半は、ノルウェー旅行を挟みながらも、とにかく自分の関心分野の言語力を高めることに専心したいと思う。2017/5/24

1093. 日本の思想と日本語

昨日は、オランダ人の友人であるピーターとランチを共にした。「タレントアセスメント」のクラスが終了した後、このコースの課題について意見交換をすることも合わせて、キャンパス近くのレストランに向かった。

このコースは私が普段足を運ぶ社会科学キャンパスで行われているのではなく、街の中心部から少し東にある別のキャンパスで行われている。このコースを受講するまで、私はそのキャンパスに足を運んだことがなかったため、キャンパスに行くための途中の道はいつも私にとって新鮮だ。

昨日の朝はとても爽やかであり、20分ほどのウォーキングは非常にすがすがしい気分を私にもたらしてくれたのを覚えている。クラス終了後にピーターと訪れたレストランは、フローニンゲン近郊の農家から食材を仕入れ、それらを元にしたオーガニック料理を提供してくれることが特徴的だ。

私たちは、注文を済ませるよりも先に、課題について意見交換を始めた。今回の課題は、ルーワーデンにあるホテルマネジメントスクールの入学審査に関して、その学校が現在用いている各種のアセスメントの質を評価し、改善策を提示するというものである。ピーターがまず自分の考えを述べ始めたので、彼の話聞くことに専念することにした。ピーターは若干独特な形と音を持つ英語を比較的早口で話すので、ピーターの英語に脳を調節するためにいつも少しばかり時間を要する。

ピーターが考えている論文の構成案を理解し、特に改善策について面白いと思ったところで注文した料理が運ばれた。その後も食事をしながら課題について意見交換を続けていた。意見交換がひと段落すると、自然と様々な話題に会話が移った。

ピーターは現在発達心理学の修士課程に在籍しており、プログラム終了後は、フローニンゲン大学の研究者養成用の修士課程—これはオランダに特有の制度であり、博士課程に入るための登竜門のようなプログラム—に進む予定だったが、アムステルダムにいったん戻り、そこで仕事を探らしい。将来的には博士課程に進む意志があるとのことであった。私もピーターと同じく研究者養成用の修士課程に進むことを考えたが、その道を通らなくてもフローニンゲン大学で博士課程のポジションが得られる可能性が開けてきたため、結局、実証的教育学のプログラムに進むことにした。

少しばかりお互いの今後について話をしたところで、今度は話題が日本のことに移った。以前紹介したように、ピーターはお茶に関するソムリエであり、去年はオランダの最優秀ソムリエに選出されている。ピーターのお茶に関する造詣は非常に深く、お茶を通じて見える日本の新たな側面を私はいつもピーターから学んでいる。先々週のクラスの時、ピーターが台湾産のお茶を持ってきてくれ、持参した陶器に注いでお茶を出してくれた。

真後ろの席にいたドイツ人の友人であるフランとインドネシア人のタタが、クラス開始前に教室の最前列でお茶を飲むピーターと私に呆れ笑いをしていた姿が思い出された。日本を取り巻くお茶産

業に関する話をピーターから聞いたところで、「日本のどのような点が最も好きか？」という唐突な質問がピーターから投げかけられた。とっさに出てきたのは、「日本の思想」という答えだった。

ピーター:「それは神道や儒教的な思想のこと？あるいは禅仏教のような思想のこと？でも、一部にはキリスト教の思想も入ってるよね？」

私:「確かに、それらも日本の思想を形作っているものなんだけど、自分が尊重しているのはそうした思想区分で括られるような日本の思想ではなく、もっと深層的なものなんだ」

ピーター:「より深層的なもの？」

私:「そうだね。今話しながら思ったのは、どうやら自分は日本の思想そのものを尊重しているというよりも、そうした思想が育まれる日本語そのものに敬意を払っていることがわかったよ。特に、自分は日本語が生み出す独特の意味世界や感情世界を尊重しているように思う」

ピーターから投げかけられた「日本のどのような点が最も好きか？」という問いに対して、思わぬ回答が出てきたことに自分でも驚かされた。米国から日本に戻り、日本を再び離れることによって、日本の思想がいかに独特なものであり、それがいかに日本人の生活に浸透しているかについて、改めて考えを巡らすことが日増しに強くなっている。

日本人の精神生活を規定する日本の思想というのは、ピーターの言うように、確かに様々な思想が混在したものであるがゆえに掴みどころがないことは確かである。しかし、私たちの目には見えないところで日本の思想というのは紛れもなく存在している。こうした日本の思想への関心が高まることに応じて、そもそもそうした思想を育む母体としての日本語に強い関心を私は持ち始めているようだった。これは欧州での生活を始めて以降、自分の内側で静かに進行していた関心であり、日本語が持つ意味世界や感情世界の固有性というテーマは、日本語を母国語として持つ私にとって避けては通れないものなのだろう。

ランチが終わり、レストランを後にした私は、このテーマが自分の想像以上に重要だという思いに包まれていた。2017/5/25

昨日の早朝に、自宅を離れる前にシャワーを浴びていたところ、自分が「精神主義」や「鍛錬主義」に陥りがちであることにふと気づいた。それらは何らかの対象に関する自分の知識や技術を深めようとするに不可欠なものであり、内面の成熟を促すものであることに間違いはないが、得てして自分が鍛錬を強調しすぎることが多いことに気づく。

それは毎日の日記の節々に見られることであり、過去の日記を眺めているとそれは明らかである。自分の内側に何かを育み、それを深めていこうとすると、間違いなく献身と関与の伴った鍛錬が必須である。しかし、鍛錬をすることだけが生きることなのではない。そうした当たり前のことに気づいたとき、私はこれまで自分が盲目的に依存していた鍛錬主義から脱却することができたように思えた。

同時に、これからは意識的に鍛錬主義の中に自己を晒すことによって、これまでとは質を異にするような鍛錬を行っていきたいと思った。鍛錬主義というのも私が自分の頭の中で作り上げた概念であるがゆえに、自分の内面の成熟に合わせて、それは別種の姿を見せるはずである。

シャワーを浴びている最中に、自分の思考空間の中にある鍛錬主義の持つ意味がまた一段深まったことがわかった。結局のところ、そこで起こっていたことは、既存の自分の考えに対して新たな気づきが生まれ、盲目的なものが可視化されるという現象であった。何よりも興味深かったのは、そうした気づきは、既存の私の考え方を砕く力があるということだった。ひとたび既存の考え方に亀裂が生じ、それが砕ける音が聞こえたら、もはや以前の考え方を通じて生きることなどできない。

それが発達の不可逆性という特性だ。私がこれまで持っていた鍛錬主義が砕かれ、しばらくは新たな鍛錬主義に基づいて日々の生活を形作っていくことになるだろう。そして、また何かをきっかけとして、その考え方が砕ける日がやってくるに違いない。昨夜の就寝前にもこのテーマが派生して、発達の不可逆性と永劫回帰について考えを巡らせていた。

私たちは自己の領域における発達を遂げた際には、もはや二度と過去の世界観を通じて生きることができなくなる。そうした不可逆的な歩みを一步一步進めていく中であって、常に私たちが自己

であり続けるということ、足を前に進めたとしても自己に戻り続けるという、自己発達における永劫回帰性というテーマが私を捉えて離さなかった。2017/5/25

1095. 「自分の夏」

早朝の目覚めと共に、寝室の窓の外から景色を眺めると、朝もやがかかっていた。その様子を見ると、「ああ、冬の時代が完全に終わった」と思った。北欧に近いオランダ北部の気候的な特徴からか、冬の時期にはそのような朝もやはほとんど見られない。そうしたもやが早朝に見られるのは、春から夏にかけてのことである。

朝もやを眺めたところで朝の仕事に取りかかった。午前中の仕事は相当にはかどるものだった。ついに修士論文のドラフトが完成し、あと数回ほど自分で読み返したあとに、月曜日中に論文アドバイザーのサスキア・クネン教授にドラフトを送ろうと思う。先日の日記で書き留めていたように、とにかく納得のいく終止符を打つことによって、この論文を次の論文への橋渡しとしたい。

自己規律と自己批判の精神を絶えず持ち、文章を書き続けるという修練をより徹底させていきたい。これはいつも述べていることと同じであるが、自己に課す規律も批判も依然として生半可なところが多分にあり、文章を書くということについても、その質を議論する前段階に今の自分は位置しており、文章を書く量が圧倒的に足りていないことに気づかされる。

自らの知識と経験を真に血肉化させる最良の方法は、他者に教えることだと思うが、書くことは自分に教えることに他ならないだろう。他者に何かを教える前に、私は自分の知識と経験を徹頭徹尾、自分に教えなければならない。書くということは、まさに精神的な自己調教に他ならないのだ。

午前中に論文の修正を終えた私は、コーヒーを片手に書斎の窓際におもむろに近寄り、外の景色を眺めていた。早朝の朝もはやどこかに消え去っていた。そこに広がっていたのは、澄み渡る青空だった。広大な空にかかる無数の飛行機雲を見た。

それらは本来、一つの地点から他の地点に向かって水平方向に形作られているはずだが、私の目には、それらの飛行機雲が地上に降り注いでいるように錯覚された。天空から垂れ下がる無数の飛行機雲は、何かを祝福するような白い紙吹雪のようであった。飛行機雲をそのように知覚した私の

感情は高鳴っていた。意識も身体も高揚するような感覚が確かに内側にあった。目の前の空を旋回する鳥の群れたちも、きっと今の私と同じような気持ちであるに違いないと思った。

旋回する鳥たちを見ていると、自転車の後ろに小さな子供を乗せた父親が懸命に自転車を漕いでいる姿が目に入った。その親子も旋回する鳥も、等しく自らの生活を形作っているのだと実感した。こうした一つ一つの尊い生活は何としてでも守られなければならないものである。自転車に乗った親子が私の視界から消えていく際に、私は最後に街路樹の広告看板を眺めた。

「ああ、また看板が変わっている」と思わずつぶやいた。この広告看板は、定期的に中身が変わるのだが、今まで一度もそれを張り替えるところを見たことがない。その瞬間、私たちの社会は、目には見えないところでなされる無数の仕事によって成り立っているということを改めて思わずにはいられなかった。人間の成長が、私たちの目には見えないところで静かに育まれていくのと同じように、私たちの社会の中には、目には見えないところで進められている仕事が無数にあるのだと気づかされる。

誰からも見えないところで、絶えず自分にできる小さな仕事をひたすらに継続させていきたい、という思いを新たにした。今日は午後から気温がぐんぐんと上がるようだ。これからやってくるフローニンゲン¹の夏は、朝夕はとても涼しい。いずれにせよ、夏という季節がやってくることは間違いない。私の内側は夏への準備がすでにできている。いやむしろ、私は「自分の夏」を常に内側に持っているのだ。2017/5/25

1096. 診断・予測に関する人間の脆弱な直観力

一日の全ての仕事を終え、これから作曲の学習と実践を行いたいと思う。先週に行われた四日間の学会に参加していた期間は、なかなか作曲に時間を取ることができなかった。昨日あたりからようやく生活リズムを取り戻したため、再び作曲の探究に打ち込みたいと思う。

今日は午後から、「タレントアセスメント」で取り上げられている論文を四本ほど読んでいた。どれも心理統計学に関するものだが、込み入った数式は特になく、人間の能力を測定することに関する方法論や考え方の枠組みを理解することに努めていた。これは随分と前の日記に取り上げたことだが、臨床家の判断と統計的手法を用いた判断の正確性に関する論文を今日も読んでいた。

非常に大雑把な言い方をしてしまうと、神秘思想に傾斜している臨床家であればあるほど、人間の直観力の正確性を信じたいと思う傾向に陥りがちである。特に、人間の心を扱うサイコセラピストやコーチには、神秘思想を信奉するような者が多く、自分の直感的判断を信じたいと思う傾向が強いという印象を受ける。

以前に紹介したように、とりわけ精神病理の診断や能力の評価に関して、私たちの直観力は極めて頼りないことが多くの実証研究によって明らかになっている。私も心理統計学を学び始めるまでは、診断や予測に関して人間の直観力を信じるような傾向があったように思う。しかし、ひとたび心理統計学の手法を学び始めると、仮に線形回帰分析という最も初歩的なアプローチを考えてみても、その結果と自らの直観力の結果を比べてみると、その差は歴然としている。予測をしたい従属変数に関して、独立変数をたった一つだけ設けたとしても、人間の直観力ではその予測はどうすることもできないのである。

米国に留学していた時、私が在籍していたプログラムではないが、サイコセラピストを養成する修士課程において、心理統計学の講義が必ず必修となっていることを知った。それはおそらく、サイコセラピストが直感的にクライアントの精神状態を診断することの限界が考慮されていたのかもしれないと改めて思う。サイコセラピストである知人の方から話を伺ったところ、日本においても臨床心理士に関する国家資格が設けられるそうだ。

専門的なトレーニングを積んでいない日本の多くのサイコセラピストは、とりわけ自身の直観力を過大に信じる傾向がある気がしてならないため、今回の国家資格の導入に伴って、最低限の心理統計的知識を学ぶ機会がサイコセラピストになろうとする者に与えられることを願う。サイコセラピストの診断が誤ってしまうことは、大きな問題につながりかねないため、診断や予測における人間の直観力は極めて頼りのないものであることをサイコセラピストは認識しておく必要があるだろう。それはまた直感に頼りすぎるコーチにも当てはまる。2017/5/25

1097. 眼・意志・心

学ぶこと、そして、何かを作り出すということは、私にとってとても大きな意味を持つのだとつくづく思う。同時に、それらにさらに専心したいという思いが日増しに強くなる。しかし、それを実現させるた

めには、絶え間ない自己規律と自己批判が必要だ。また、それに付随して重要なのは、周囲の雑音に惑わされないようにすることだろう。

第二弾の書籍『成人発達理論による能力の成長』の最終校が完成し、書籍がいよいよ世に送り出されることになる。書籍の出版に伴って、身辺が少しざわつくかもしれないが、それに惑わされず、それに囚われないようにすることが何よりも大切だ。

社会の中で生き、社会を通じて生きるという意志に変わりはないが、これまで以上に徹底した形で、社会の表層的な言説や現象に囚われないようにしたいと思う。それらに囚われる時、自分が思い描く学びの形や創造の形が一举に瓦解する姿が目に見えている。社会との付き合い方は徹底的に吟味されてしかるべきものであり、のうのうとこの社会の中で生きることはもはやできない。

昨日、日記の書き方について少しばかり考えを巡らせていた。自分の日記を眺めていると、一つのテーマに絞って文書を書き綴る時もあれば、複数のテーマにわたって文章を綴ることがある。どちらの書き方も無意識的に行っていたことなのだが、重要なのは、テーマが多岐に渡ったとしても、それらのテーマがある一つの一貫性のある主題によって貫かれていることだ。もちろん、それは明示的な主題である必要はない。

複数のテーマが暗黙的に一つの主題と繋がっていればそれで良いと思うし、逆に、それらのテーマが根底の部分で一つの主題と繋がっていないのであれば、それは問題があるように思える。今後は、テーマが多岐にわたる場合、隠れた一つの主題を意識し、その主題によってそれらのテーマを梱包していきたい。

そもそも、テーマが多岐にわたる形で文章を書くときには、それら一つ一つのテーマに関して、自分の内側に小さな気づきや小さな考えが芽生えている段階だと言える。そうした気づきや考えが大きく成長するのを待つのではなく、発露の段階から文章の形にしていくことによって、それらを育てていくという姿勢が大切だ。

小さな気づきや小さな考えを見逃さない透徹した眼、そして、それらを文章の形にしていくための確固たる意志、さらには、それらを自分の内側で育てていくという思いやりの心を持ちたいと思う。

2017/5/26

日常、自分の内側で極端な発想や見解が沸き上がる時、それとの向き合い方が少々難しいことがよくある。実際には、それらに向き合うということはおろか、その瞬間に自分が極端な発想や見解に絡め取られていることに気づかないことが多々ある。

昨日も、「健全なる自己批判」という概念に対して、その健全性がどのようなことを意味するのか、どのような自己批判であれば健全だと言えるのかについて考えていた。「健全」という言葉が一般的に内包しているような、柔らかな感覚質を持つ自己批判では、自分の内側で何かを深め、何かを鍛錬することには不十分である。

「健全な自己批判」に対して私がイメージしていたのは、対象となる能力や自己そのものを一つの身体と見立て、それを木っ端微塵にし、飛び散った肉片すらも踏み潰してそこから新しいものを作り上げていくという姿だった。そのイメージが頭の中で映像として進行する過程において、身体の粉碎までは何の抵抗感もなかったが、飛び散った肉片を拾い集めたいという気持ちが自分の内側に起こっていた。だが、それを拾い集めてしまったら元も子もないのだという考えが次に続いた。

それらの肉片すらも粉々にできか否かに、対象となる能力の成長や自己の成熟があるのだと思い直した。そうした映像が脳裏をかすめていくとき、人間の成長や成熟とは、つくづく生々しいものなのだった。そこには肉があり、飛び散る肉があり、新たに生まれる肉がある。しかし、そうした発想は少しばかり極端なものなのかもしれないと思った。

だが、その瞬間に自分の内側でそのようなイメージが流れていったのは事実であり、イメージに対する解釈が極端なものだったのか、イメージを創造する自己の根幹部分が極端なもので支配されているのかを疑った。

流れていったイメージに忠実に言葉を与えれば、上記のような解釈になるため、解釈そのものが極端なのではない。さらに、イメージを創造する自己の根幹部分とは、本質的な人間性が眠っている場所であり、人間にとって根源的なものが宿る場所であるがゆえに、それらが極端なものに支配されていると理解するのどこかおかしいように思える。

そのように考えると、先ほど私の内側に浮かび上がったイメージというのは真実性を内包しており、それに忠実に言葉を与えた先ほどの解釈も一定程度に正確なものなのではないかと思ったのだ。すると健全な自己批判とは、多分に自傷的な性質を持つのだと思う。

確かに、私たちの身体が鍛錬されていく際には、筋細胞の破壊による再創造が必要とされる。それと同じことがやはり精神領域においても求められるのだろう。一方で、精神的な自傷行為は、身体的な自傷行為と同じぐらいに危険性を持っていることも事実であり、安易にそれを遂行させていくことはできない。ここまで文章を書き連ねてみても、結局、私が回答を与えたかった「健全な自己批判」なるものについて明確な答えが得られなかった。

現在の私は、さらに激しい精神的な自傷行為を求めていることは確かであり、それを促す働きかけが内側からもたらされていることも確かである。それはある意味、精神的自傷行為に関する自己意識と内側の感覚との一致であり、それに従うことがもしかしたら健全な自己批判なのかもしれない。どのように転ぶのかわからないが、自らを対象にしてその確からしさを検証してみたいと思う。2017/5/26

1099. 作曲への取り組みについて

ここ数日間、奇妙なほどに夢を見ていない。おそらく、この数日間にあっても夢を見ていたのだと思うのだが、記憶に残るような夢を見ていないのは確かだ。そのような状態を見ると、ある意味、不気味な静けさが無意識の世界を覆っているように私には思える。間違いなく、私の無意識の世界では四六時中何かが進行しているのがわかる。

記憶に残る夢が現れるのかどうかというのは、そうした潜在的なものが発現するか否かというだけの問題であり、絶えず自分の内側で何かが動き続けていることに変わりはないだろう。夢についてこうしたことを書き留めていると、今夜は何か印象的な夢を見そうな予感がしている。

昨夜は少しばかり作曲の学習と実践を進めていた。以前に作ったファンファーレの一節がとても気に入っており、そこだけ何度も繰り返して聞いていた。日記を読み返すことによって、自分の言葉から自分が励ましを得ると同様に、自分が作った曲から自分が励ましを得るというのも不思議なこと

だと思った。私たちが真に自己を深めるためには、健全な自己批判のみならず、自己への励ましも同時に必要となることを物語っているかのようであった。

文章を書くということと曲を作ることの双方が、同じぐらいの重要性を持ち、同時に、同じぐらいの歓喜を私にもたらししてくれることに気づき始めている。そのような思いを持ちながらも、昨日は一点ほど反省することがあった。それは自分の浅薄さを批判するものである。

昨日、作曲に関するテキストを読み進めていた時に、いつになったら自分は内側の思想や感覚を曲の形に表現することができるのだろうか、という焦りにも似た感情を持っていた。こうした焦りは、確かに作曲にさらに打ち込むための潤滑油になりうるが、得てして、そうした焦りが自分に対する失望感につながりやすいことが問題である。私が思い出さなければならなかったのは、作曲に対する自分への失望感からそもそもスタートさせたという事実であった。

作曲を始めた時の私の音楽知識と経験は本当にまっさらなものであった。そうした自分に対して失望感を抱きながら、それでも失望感に代わるような気持ちを持って作曲を始めたことを思い出さなければならなかった。

手元にあるベートーヴェンが残した楽譜を見たとき、それと自分の曲との距離を嘆いてはならないと思った。また、短い時間単位で自分の作曲の進展を捉えてはならないのだと思った。少なくとも五年後、十年後を見据えて今の取り組みと向き合わなければならない。あるいはもっと先の自分を見据えながら、作曲に少しずつ取り組んでいくことが大切だ。

毎日、一時間弱でも良いので、作曲の学習と実践を積み重ねていたその先に、目に見えるほどの何かが現れてくれればそれでいいのだ。仕事と同様に作曲も、短い時間単位でそれを捉えてはならないし、長大な時間をかけて取り組むことが何よりも大事なのだと思う。2017/5/26

1100. 外発的動機との向き合い方

今日は、雲ひとつない青空が続く天気の良い一日であった。そうした天気の恵まれた金曜日の午前中、まずは、複雑性科学と教育哲学を架橋することを試みた興味深い専門書の二つの章を読み進めた。私の関心は、やはり人間発達に中心があり、現在はそれを取り囲むように複雑性科学や教

育哲学に広がっている。とりわけ、午前中に取り掛かっていた専門書“Complexity Theory and The Philosophy of Education (2008)”は、複雑性科学と教育哲学の両方のテーマを扱っているため、私の関心と完全に合致するものであった。

このところ、人間発達の中核に教育があり、教育は経済的な枠組みや社会思想と切っても切り離せないものであるとつくづく思う。人間発達にとりわけ強い関心を持つことは、そのまま教育に関心を向かわせ、教育に関心を持つことは、経済的な枠組みと社会思想へと関心を向かわせる。そうしたことを背景に、今の私の関心は、人間発達をコンパスの中心点とし、そこから様々な関心事項と繋がるようにする形で探究の円が描かれているのだと思う。その専門書に掲載されている二つの論文を読み終えた後、私は「タレントアセスメント」のコースで課題となっている論文の二読目を開始させた。

本日中に目を通しておきたい論文は七本ほどあり、午前中にそれら全てを読むことはできなかった。論文の主張と発見事項をまずは的確に掴み、それらの主張と発見事項を支えている重要な文章をワードにまとめながら読み進めていた。

もちろん、心理統計を含め、能力測定 of 専門的な理論や方法論を学ぶことは私にとって有意義なのだが、それら以上に強く読書欲を刺激するいくつかの論文と専門書が書斎の机の右隅に積み重ねられているのを見ると、ついついそちらに手を伸ばしたくなる自分がいる。

そして、そうした衝動を我慢しながら今取り組んでいる論文に目を通すと、何となくそこで展開されている言語空間にうまく没入することができなくなってしまう。体系的に構築された何らかのコースに沿って探究を深めていくことは、もちろん有意義な学びをもたらすが、自ら探究過程そのものを構築していくような、自分の内発的な動機だけに基づいた読書は私にとって極めて重要な意味を持つ。

現在、フローニンゲン大学での最終学期の佳境に差し掛かっていることもあり、どうしても外発的な動機が混入する読書をせざるをえないのは致し方ない。それらを内発的な動機に限りなく近づけようと試みるが、そうした試みをする時点で、純粋な内発的動機とは程遠いものになってしまう。

以前、「創造性と組織のイノベーション」のコースを履修した際に読んだ論文の中で、外発的な動機が必ずしも探究に害悪をもたらすものではないことが指摘されていた。そうしたことから、今後自分の中で外発的な動機とどのように付き合っていくのかという指針を自ら作りたいと思う。2017/5/26